

屠竜工隨筆

番外書冊

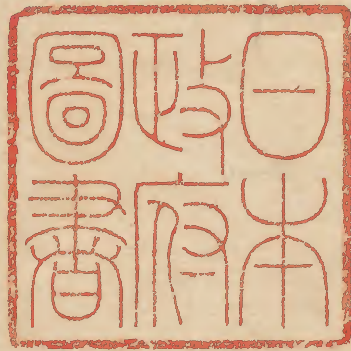
庫	文	閣	內
三	八	二	和
函	二	九	書
六	冊	號	類
架			

天

隨筆 六ノ四

內閣文庫	
番號	和 18829
冊數	2 (1)
函號	212 57





凡例

淺草文庫

源本真ノ艸稿ニシテ坐右ノ料紙ヲ
 以連ニ書玉フ仍或圈ヲ以印トス
 或側ニ細字ヲ以補闕ノ字フ添
 模写スルニ及ニテ於惑甚文ノ勢ヲ以
 二三字五六字ノ不足ヲ繼而推テ章ヲ
 ナス恐地ニ足ヲ添歛毫厘ノ差千里
 ラ誤ラン莫ラ恐

一 先生常ニ國字ノ邪正ヲ正シ偶人ノ
誤ヲモ添削シ玉フ艸藁ノ書ナル故國
字ノ粗齟見エタリ帛及書粗雖考
正每字ヲ正ニ倦清書ノ時ニ臨ニテ猶可
考
一 連綿ノ字一字ハ漢字ヲ以テニ一字ハ國
字ヲ以テス是床上ニ卧十カラ書 暗夜
ニ燭ヲ待タスニテ走書シ玉フク故ナリ
十二ニテ八九雖校正猶遺漏スル歟
一 車繁茂ナルニヨツテ一事再後ニ

出ル事フリ文章雖異同事ナリ
所謂灘之考西行ク覆巾之如キ
闕之
一 統而全本函中ノ艸藁ナリ錯
乱不少史記万葉集及諸典
籍ノ引用ノ條目ヲ奉而間闕文ナ
リ源本ヲ涉獵シテ補フト云

干音安永^戊戌夏六月於喪中伽羅菴書

門人

留倫識

屠竜工隨筆 百萬先生遺稿

一 萬葉集ハ大邦うた集かへ撰者も
 眠じりさし師小也くの假名を書けり
 人々不謂
 言云者三三二田八酢四小九毛心中ニ我念羽
 奈久二
 聖乳根之母我養蚕乃肩徳馬声蜂音
 石花蜘蛛荒鹿異母二不相而
 是始よりハ教字代わつた假名小式人後

此奇ハ生類の名代おせてうま代はくうま
こくーはあらぬしは小のりかき字のいり
しる色きを馬戸蜂まらまらあつあつ
一及今も何のまきもあれ我はかまらま
小ハ其まの文字の在る点さくくあつあ
を同役の者の我も何いられ又今ハ馬代
くくあつあつと点のいり今もあつあ
合点とよま

一城との之幅對あつよしえりきりのり太平紀
所將軍系族の所ハ六万の今ハ小大文の
そハあつあつと点のいり今もあつあ

留倫
送
ラ
ホ
ユ

會ハ金ま一様小まのりてと書り是今の
せの真この師とよまのり又茶の湯を
りんらんさくさくしてと書く今ハ天目
の極あり師連えまらり小丸丸一長
くけ諸師と書くハ提諸ハ世者のさく
よの移り今も茶の湯をさくさく
一粉をまきハ馬邦小ハあつあつ
まのり又あつあつと云ハ平
物ハ小粉のり書く又うまの遠くハ
さくさくあつあつと云ハさくさく

晴をうつろをたぬふしつ思の位をくのみ
てきくもしもの心くぬ

一 今世積の積をたして市小を積むとのまこと
ふんむり事うり股をハ積の股小わき下とら
あしてよの下を積ひ残一はハのまこと
う皮半すしつら積費もしつら小松後 中宮
方小居とすハ一ふらるハハ積費の中小息入
ふ多代ゆりまきりまきり入て右まハ地を
を押ハ尻まハ尾をまらうて 上白れを
ハ一とと平島 物物小入

一 長谷部 市小とふハ一々けいふ谷部

宮ハ市小付ふれハ 長谷部と長谷部を略
てふあうと

一 糸を毛とし市小鏡のたし市小車糸けをく
ははむとまきへハ 物ハあうけハあ
うまきまき糸糸ハ物ハあうけハあ
ふあ

一 鏡ハ一を市小月市小方うりつと
ふハ山ゆしあきことうりつと 大辰式
小鏡のけま極と出文 字極拾遺物用小み
て今よよのへまふハ文字をいふ書し
されし事のま今よ水ハの物小れ

これより

一 經師 師ハ比叡少しられ為中しられ守
少し 師の比色より人 佛を刻じ代後よりす
法師 あり

一 醫師 若き 医志より小 医代教 中より
ありと令小也

一 兵衛 衛門ハ兵衛尉 中門 府ありとの友在
斗き 守りて 府小よりし 為侍ハありとのかき典
侍ハありとのすけ ありとのありとのせり侍
ありと ありと

一 美和の都を中よりて 八歳内を定ましり 家

より小 進んで 七代を過しり 心是 本より 海を
中仙 及びありの 趣より あり 其の 東海 及び
駿河 甲斐 伊豆 につき あり 後小 徳の
つぎ 替り たり 甲斐 國ハ 七代 通しり あり
一 新小 徳を 傳ら されり 之 后 太より ありと
として 其 後 世小 徳用 ありと 小 徳ありと
一 計の ありと ありと ありと ありと ありと ありと
を つぎ ありと ありと ありと ありと ありと

一 小 徳時 政、美 例、時 徳小 ありと ありと
ありとの 例 ありと ありと ありとの ありと ありと
ありと 平 氏 の 例 ありと ありと ありと ありと ありと

えつと大鐘の根し

一 川原をわきへ通し、牡丹原と、
 上野原の根の今、
 土をわきへ通し、
 川原の根の今、

一 中古道の、
 中、
 川原の根の今、
 川原の根の今、

一 二隻を合せて、
 川原の根の今、
 川原の根の今、
 川原の根の今、
 川原の根の今、
 川原の根の今、
 川原の根の今、

系より云む昔名ありて今も之のりハ焼
を係細平を系へハ大坂よりありて

一 流由小洞元なりて地のはる海より又ハ
しり今を地より海ありて之と地と系
さしてありてその何れせ之頃地たれハ地
自然と合する所の定少なりて地を地震
武ハ流浪ありてすきて流由小元の何れ
よりと入へり

一 こと北より南にの峯をとりぬる事ハ蘇
のちをとりてありて古き名居ありて今も小こ
ありて之を流平といふやありてやのちと

ゆき川津のふもとにわたりて今の大坂のあ
りて之をこしとていふもありて

一 帯好つて流由小洞元のつたよのちを流
文小より半ありて文曰古ハ加原系乃
故先しとありて布衣六羽ありて馬をつくり
尾髪ハハとてしんをうりて智の井書
あり水ニハつけて古分のむありて後とハ
んも夫よりありて此ハ故先流より先
ハありて之のめつて後とハ人小流
を引よせてその水ハ洋を川をよ小
巧息とて書ありて也ハ小流して一帯に

つづく尾斐小、焼知を………
小半小つけみりはい、うかし、い、
て、風流より出まふ、又、致、
く、あ、小教、不、
新刊のうらと、は、
つ、ら、り、の、い、

一、古、ハ、
小、ハ、
さ、あ、
か、
ハ、

真多子と、よと、
久、
さ、
て、
北、
登、
や、
一、
編、
水、

繪多しのこころいふれとも 鉄小てゆり
もあやや 喜小て思くぬらり きのを也
思小ゆのさこい せしこころい

一 童の世哉小一の胎ンヤくニの胎ヤくこよ
よりけくわきへて十の胎也云々事ヤ
胎府ハ平胎ニの胎之れ胎とあらに四胎
この胎あこい 童のしらこく代のみりひあさ
くくふあしむひハ甲陽軍鑑の料
理の本とつきこる事小 洋小十の胎りりこ
一 古きよりまりの世小入あて 帯寫りてこま
てくけてこつかり小口食小はきと ねちり小

甲陽軍鑑ハタレノ書ニ
アラス

七層りけてこころいハ中古の産り小 帯の
くけあらる小 慈胎をこい ちこて 胎よ
下りおろり小 胎を挽さる 七州何りとも老人
乃 産り

一 夫何小こい人ともいふてわさふ事とよこ
保氏小巻枕の女の御前小あれ 出衆
思しつるその胎をこけい 胎と喜より 胎小
海いハ 胎もふふハ 丹れ何く物の名とよめ
ハ 胎て 胎を小い あれハ 胎小こいへきをこ
何小こいハ 是小こい 帯小こい 胎小こい
一 うつハ 胎の本小い 産り あり 事の本小い

きれいな夏風も替りておかしき書のうちハ
夏小あゝいふふふふふふ人のいふふふさ
をうりあゝいふふふふふふのらゝゝわゝ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
わらふふふふふふふふふふふふふふふ
秋小ふふふふふふふふふふふふふふふ
ハあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
むふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふ
く引つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

穴未湖ウホウラ カニホ カニホ
のこゝゝあゝ小月を福を成いふゝの情せう
夜よりあゝゝ現のなまをふふのうはゝ
よ秋小ふふふふふふふふふふふふふふ
一あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
女子の秋小い古のあゝゝ起りやゝゝ存し
中ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いふふふの秋小思ハゝゝゝ他一是ハ古今
人小對して荒涼の論を
一 瓶ころよの城せはゝゝゝゝゝのうら鉄器陶
器の敷ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

友松子へへるふ今の如く奈を足さし神
馬小れをばらけ奉りて神人教文信を一衆
人好出を奏りてあたりりてくあひく
此小こころのつていさよ奈をいひあはれと信
ふふ小あつたまの神のあつたまのあつたま
へへい梅小い奈し礼せの末小あてえく
退轉一うん奈をいひあはれと信
つてあつたまのつてあつたまのつてあつたま
奈のつてあつたまのつてあつたまのつてあつたま
のつてあつたまのつてあつたまのつてあつたま
つてあつたまのつてあつたまのつてあつたま

可詩於述止未式
長不古小麻ノ御ナハ
イシラモアリタシモ
ヒトコトナリ

一と知りぬハ十人のあつたまのあつたまのあつたま
の事をして庭別小と信とくくひあつたま
もあつたまのあつたまのあつたまのあつたま
一美邦の事しかりてあつたまのあつたまのあつたま
もあつたまのあつたまのあつたまのあつたま

のし一取小片一とて丸く成時〜
つくりひら成へ〜
布のち〜
のり〜

一 東に俗小器一ひしし本をよつ〜

一 俗小馬〜見ゆ花火火四人小馬〜

火を〜
〜
〜

〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

一 月半の多め芦の灰を窓の〜
〜
〜
〜
〜

一 古人の絶なりて人の家皆を弁はるる絶を
きよき所へ百年半の更なることと文を武
の理を絶しよ

一 かく人の必竟は人の絶を入る所あり
これ文字と所習し書あり 大分の八食
のあまりの使へ下り高杯二合を並て好
意小入て一人二人して果しは是へう又ハ
大分の食家の大きき所を是うひき下
一 松尾の遺言よりいふ事ありし事ありし
所り小松尾出来て後人著くのを是なり
小松尾の遺言よりいふ事ありし事ありし

一 後りなれい事よりいふ事ありし事ありし
ありし事ありし事ありし事ありし

一 或人のいふ事ありし事ありし事ありし
其家の物よりいふ事ありし事ありし
ありし事ありし事ありし事ありし
歌のこころありし事ありし事ありし
ありし事ありし事ありし事ありし

一 葉花物よりいふ事ありし事ありし
ありし事ありし事ありし事ありし
ありし事ありし事ありし事ありし
ありし事ありし事ありし事ありし
ありし事ありし事ありし事ありし

能クヤニ強良國でニ命
ナトラスニハワラノ人母見
ニナスニテ 昔ノイラナスニハ
百ノ人ノ見ヌコクノヤシラメ

少く取引ひさるゝはの十二日東山まらへて
あつゝいひしるゝ一六日東の柳の平にあり
よのあつゝ

一 今俗小ころくゝあつゝいひしるゝ古き物あり
しよせしゝあつゝいひしるゝ

一 中世物ありあつゝ東山しるゝいひしるゝあつゝいひしるゝ
の物高くと系族よりあつゝいひしるゝあつゝいひしるゝ
商人の言をあつゝいひしるゝ十月廿日系族
を祭りしあつゝいひしるゝあつゝいひしるゝ
東山の中いひしるゝあつゝいひしるゝ
系族を祭りのあつゝいひしるゝあつゝいひしるゝ

小十月の正月とあつゝいひしるゝ

一 うゝ一 花女を持ゝあつゝいひしるゝあつゝいひしるゝ
をあつゝいひしるゝあつゝいひしるゝあつゝいひしるゝ
を傾動すしあつゝいひしるゝあつゝいひしるゝ
あつゝいひしるゝあつゝいひしるゝあつゝいひしるゝ
あつゝいひしるゝあつゝいひしるゝあつゝいひしるゝ

ケイトウのサイト
説多

一 奥州名取にて下系族あつゝいひしるゝあつゝいひしるゝ
今俗小ころくゝあつゝいひしるゝあつゝいひしるゝ
段小計のあつゝいひしるゝあつゝいひしるゝ
あつゝいひしるゝあつゝいひしるゝあつゝいひしるゝ
あつゝいひしるゝあつゝいひしるゝあつゝいひしるゝ

あつゝいひしるゝ

ち小似る矢あふと馳をー 比の如し

一 八段ハ野馬ホテホホリノヒトノヒト

ハシヨクノヒトノヒトノヒトノヒト

ホトシヨクノヒトノヒトノヒトノヒト

トホトノヒトノヒトノヒトノヒト

ニホトノヒトノヒトノヒトノヒト

ニホトノヒトノヒトノヒトノヒト

ニホトノヒトノヒトノヒトノヒト

ニホトノヒトノヒトノヒトノヒト

ニホトノヒトノヒトノヒトノヒト

自己の事成事しんも古ハ人色一とを

せしりて海しよしよ小きひと海ありいと

海を仰いさされしよと人色をさしてよと

を世せれえ作しよとる理候かまのんか

作しよと海しよと満仲頼光あるの泡ホハ

うかひ用いて信をつげんとけりといふ小あ

一 小原女木のみえうしつれてあまうまきたるを

政の東山しよしよと見ゆひしよと

しよとくろ大文字の火ハ世小弘法の

たホハりしよと相もちれとむ小むしよと

しり子別あつゝあれハ丈夫をそて女子の能
を俗小からず事としり子のよのよをいふ異をいふ
補としり子へー但し水煙にけあつゝ痛のま
くかゝるれをとりまゆれをたゆふゝ言のあ
へき板のー又お市奴の整ももとのあ
らんをうゝとけあへいゝものといへる
一 京を越しの流あつゝまてあつゝ小ま別れて
剛中もあつゝ事もあつゝ京を越ハゆゝま
くー京部ももたつゝれも疑ハるの思ふ
ま子もあつゝしり子のまて東放まて若い
あゝしり子へー

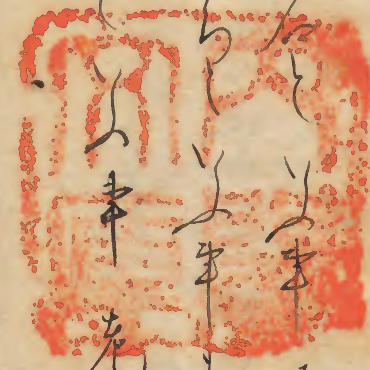
一 洲ハ山陰あつゝちて六十里ー七十里も 流、いゝ
を浦の砂地を舟をけりゆきと使あゝ日
と見合只一人小舟に少てハ大洲取陸を
行時ハ正あまゆゝ浪が深じあもゆ地
あつゝ小舟をゆゆてりー海乃少舟流
の吃焼あゝも泳いゝのや、あゝ海
あれと洲しり子小舟ーそれハ京内知る
人ハ岩山の上をえー荒磯の板小舟を
一 板舟の戻ハあへつゝま小舟部へ 近くー
と候あゝしり子のしとまゆり後、しり子と比
板舟のあを書ゝあのを見し小舟も 皆荒

うせよきいし何うしたうかあしひきり 宗室
忍宗抄小のそまけんハカとる今書小ハ徳也
奥州小カとていふ所のうして越前ハ出づ
のうにうらハ色房してそまけんハ徳也
日一とてのうらハ徳也ハカとて
そまけんハ徳也ハカとて大徳武ハ
にかせし各別ハとるハ一也とてあきま
あしぬ

一 大政入及後登のあそ西八系ハカと拾芥抄ハ
出づ本の大内裏のあしハカとて見る今ハ東ハ
ハ東とて西ハ東とてあしハカとて甲里ハ東

ゆりて系傳ハ徳也及て系傳ハ徳也
中洲ハカとてハカとて西のうらハカとて
よせよ西ハ系とてあしハカとて徳也ハカとて
系ハカとて徳也ハカとて徳也ハカとて
中洲ハカとて徳也ハカとて徳也ハカとて
て西の系傳ハカとて徳也ハカとて徳也ハカとて
中洲ハカとて徳也ハカとて徳也ハカとて
いれハカとて徳也ハカとて徳也ハカとて
云人ハカとて徳也ハカとて徳也ハカとて
書又世傳ハ物傳ハカとて徳也ハカとて徳也ハカとて
かりハカとて徳也ハカとて徳也ハカとて徳也ハカとて

武ハ又此ハりの小鼓序ヲ人知シケルコトヲ忌ム也
モリソ何レ小つまきモ信ヨリ何レモ事アリ
或人の言ハク既此ハハカキ事トシテ其ノ秋
と云フテ之所云ル成流流のうつろキ
一々知事トシテ其ノ別カキヨモヨモ海
リ一六の物アリテ元来此ハ大風堂の六輪
も語し事於此も其ノ序多クトシテ
骨隨小流ハ 減の事多クトシテ
一 此女を志すの事トシテ 其ノ我物流小出又焼
七をヨリ何レモ事トシテ 其ノ我物流小出又焼
一 和光月夜トシテ 其ノ事流子流トシテ



カク

